

関 東 農 政 局 長 賞

受 賞 者 ^{みち えき}道の駅^{せいさんしゃくみあい}つる生産者組合
(山 梨 県 都 留 市)

【 道の駅を核とした地域活性化 】

1 むらづくりの動機と背景

都留市は中山間地域のため、生産性の低い傾斜地や小規模な農地が分散して点在し、耕作放棄地の増加に加え、農家の多くが兼業農家で、農産物を販売するという意識に乏しく、親せき等への「おすそ分け的な文化」が根付いていた。

一方、販売農家からは農産物を積極的に販売したい、消費者からは地元産の農産物を購入したいという要望があるものの、地元農産物を販売・購入する方法が確立されていなかった。

このような状況を打開するため、農家の販路拡充、農業所得及び営農意欲の向上を図る仕組みづくり、市を訪れる観光客の受け入れと他の観光施設等への波及など地域経済発展の起爆剤となる施設整備が必要という合意形成が図られ、農林産物直売所の建設事業がスタートした。

しかしながら、直売所運営で最も重要なことは「品揃え対策」であるものの、農産物を安定出荷できる組織が存在していなかったことから、平成26年度から、農家向けの視察研修や農業技術向上のための講習会等の開催と併せて、生産者組合設立に係る準備委員会を立ち上げ、組織の形態、活動内容、出荷販売のためのルールづくり等に係る議論を進めた。

こうした経過を経て、「組合規約」、「組合出荷・販売要領」を取りまとめ、平成28年5月に「道の駅つる生産者組合」を設立し、本組合には、「野菜・果樹部会」、「加工部会」、「穀物部会」、「手工芸部会」の4部会が設置され、各部会が特色ある活動を展開している。

2 主な取組内容と成果

- 組合員によって生産される葉物野菜、スイートコーン、ニンニクなどに加え、「平成の名水百選」にも選ばれている良質な地下水を用いて伝統的な手法で栽培される水かけ菜は市の特産であり、道の駅での購入者は「新鮮な野菜も買えたので夕飯を作るのも楽しみ」と話すなど大変人気の商品となっている。
併設の飲食提供施設では、かぼちゃ等を原材料としたジェラートも人気商品となるなど地産地消にも貢献しており、こうした取組等により、組合員数は5年間で40名増加している。
子どもたちにも愛される道の駅となることを目指して、市内の幼稚園等の児童を対象に、生産される農作物を自ら収穫し、味わってもらおう「つる野菜収穫イベント」を開催しており、子供たちからは「葉っぱがきれいでおいしかった」、「むかしのひとつで大変だったんだね」等の声があり、市民との交流も積極的に図っている。
- 県営中山間地域総合整備事業により農業基盤整備を総合的に進めるとともに、県独自の農地の条件整備を行う「機構借受農地整備事業」により、組合員の営農規模の拡大や耕作放棄地の解消、増加防止に努めている。（3年間で農地の条件整備により営農再開された農地約2.5ha）
農業所得の向上と新たな特産品づくりを目指して、「高収益作物導入事業」を導入により、道の駅の近接地に「試験ほ場」を設置し、日常の肥培管理等は地域おこし協力隊員の力を活用することで、市の気候風土でも果樹栽培が可能であることが実証された。
- ブランド豚を生産する唯一の養豚農家の後継者問題や新たな特産品確保のため、地域おこし協力隊の力を活用し、事業継承の解決やブドウやモモ等の生産体制を確立することにより、3年間でブドウ・モモの作付面積が約3ha増加している。
地域おこし協力隊員は、「果樹栽培は子供の成長を見ているようで感動した」と振り返り、任期終了後は果樹専業農家として市内に定住し、組合員として道の駅に出品するほか、生産した果樹は、ふるさと納税の返礼品としても活用されている。
- 市内のお寺を会場として栄養面に配慮した食事を提供している「つる食堂（子ども食堂）」に食材提供で協力することで、食品ロス削減や子どもの貧困対策等に貢献している。
この活動は市内の大学に通う学生の「地域の子どものための居場所づくりに関わりたい」という思いから創設されたボランティアサークルが中心となって実施しており、地域の方々とも協力しながら、食を通じた地域コミュニティの活性化に繋がっている。

3 活動状況



生産者組合設立総会の様子



「道の駅つる」の施設内観



野菜部会による「夏の収穫祭」



つる野菜収穫イベント



新たな特産品として出荷を始めたブドウ



つる食堂（子ども食堂）